

## ■ 編集だより

### 編集後記

不況の真っ只中、いったい日本はどうなるのやら。民主党に政権が交代しても、内容は自民党時代と代わり映えがしない。予想通りと言えどもそれまでだが少しの希望も見出せない。製造業がそれなりの価値のある物を販売できないと、極端に値段の安いものばかりが出回ると、マクロ的には経済規模が縮小して衰退するのは目に見えている。なぜこんな単純なことが分からないのだろうか。あるいは増加の一途である高齢者を社会保障でカバーするには当然無理があるのであるから、消費税をアップしなければ収支が合わない。こんな簡単な道理が通用しない国に誰がしたのであろうか。耳に心地よいことだけを並べ選挙を有利に運ぶ努力をすることも大事ではあるが、もう少し大人の議論、成熟した論理の展開ができる国にならないと、本当に日本という国は滅びてしまうかもしれない。今年の正月もほとんど外へ出ず、森有正のエッセイを読んで過ごした。ご存知の方も多いと思うが、森有正は明治の初代文部大臣である森有礼の孫で、東京大学仏文科を卒業し、東大准教授時代にパリに1年間の予定で留学しそのままフランスに永住した人である。50年代から70年代のパリに圧倒されフランス哲学を究めた人である。必要以上にパリを美化しすぎるくらいはあるが、本物の稀有な哲学者である。渡仏7年目に書いた決意のような一文を紹介する。「僕は自分の生の存在に強くひびく道を最後まで進まなければならない。この生き生きとした感覚を喪うとき、僕の生の意味がなくなる。すべてのことが虚偽の安易さに僕を誘う。しかし僕は牢乎として僕の道を進む。自分の時間を大切にしなければならない。僕にとって最大の抛りどころは自分の中に、自分の時が流れはじめたことである。これは僕にとって何ものにも代えがたいものである。これを自覚する時、どんな苦しみもしのびたいと思う。……僕の生きているという意識、それは、自分の時間が流れているという意識と切りはなすことができない。これは一つの感覚的といってもよいものである。近代の民主的なあらゆる思想の根源はここにある。……言葉ではない世界、人間の意識が一つのものに化する瞬間、これがどうしても確保されなければならない。」

自分の時間が流れているという意識を求めること、実に美しい文章である。しかし実に難しいことである。物質的豊かさは全く次元の異なる、精神的な高みに立つ努力をすること。多くの人々が忘れ去っていることである。矜持を持って生きるという意味にも繋がるであろう。

今年の目標として、みなさん、少しでも森有正氏の境地に近づくように努力しようではありませんか。結局彼の思索の主題は、忍耐強く自らの経験を積み重ね、人間が深化・成熟するということだと思う。

木下利彦